特　色　麻布大学雑誌　第5・6巻　2002年

平成14年度高等教育改革推進経費報告

動物介在活動と療法に関する教育研究プログラム

Azabu animal-assisted therapy and activity educational program

獣医学部動物応用科学科，責　任　者：田中智夫
代表担当者：太田光明

Toshio Tanaka, Mitsuaki Ohta

School of Veterinary Medicine, Azabu University

Abstract: The Azabu animal-assisted therapy, AAT, and activity, AAA, educational program has been begun for the postgraduate and undergraduate students since April 1, 2002, which is the first endeavor at the universities of the world. The program has been developed by Dr. Dennis C. Turner who is the visiting professor at Azabu University, and admitted as the national license for the AAT/AAA in Switzerland. The organizations concerning the AAT/AAA, especially in German, Austria, Belgium, and the United States of America have highly estimated the quality and effectiveness of the program. The first course of the program will be completed in March, 2004, and the evaluated students will be given the certificates for the completion of the program.

The invited lecturers outside Japan are Dr. Dennis C. Turner, Prof. Erhard Olbrich in German. Ms. Susan L. Duncan (USA), Prof. Gail F. Melson (USA), Prof. Cindy C. Wilson (USA) and Ms. Ann R. Howie (USA). Profs. Kazuhiko Iwahashi and Mitsuaki Ohta do their duty for the program.

This year, in 2002, the lectures have been finised as follows:the instruction for the human and animal interactions, and the fundamental knowledge and technique for the AAT/AAA by Dr. Dennis C. Turner; the human-animal relationship:working with the elderly by Prof. Erhard Olvrich;service dogs, healthcare and public policy by Ms. Susan L. Duncan; theories and principles of child development by Prof. Gail F. Melson; medical / health research design in animal-assisted therapy and activity by Prof. Cindy C. Wilson; working with prisoners special needs and problems by AnnR. Howie.

目　的

動物介在療法（AAT）ならびに活動（AAA）に関する大学レベルの教育カリキュラムに関し，2年余の検討期間を経て，本年度（平成14年）4月より世界に先駆けて開講した。このカリキュラムは，本学客員教授であるDennis C. Turner博士（スイス）が1999年に完成させたドイツ語圏でのプログラムをわが国の実情に合わせて改変したものである。Turner博士のプログラムを受講し，修了した者は，スイスでは国家資格として認定され，またドイツ語圏でも国家資格に相当するライセンスとなっている。麻布大学AAT/AAA教育研究プログラム（Azabu animal-assisted therapy and activity educational program）のテキストは，すべて英語で記述され，また，原則として，講義も英語で行われている。

欧米先進国に比べ，10年以上も遅れをとったわが国の「人と動物の関係学」分野あるいは「AAT/AAA」分野を少しでも引き上げるには，この分野の教育システムを充実させる以外にない。

方　法

講師陣は，スイス（Dennis C. Turner），ドイツ（Erhard Olvrich），アメリカ合衆国（Susan L. Duncan, Gail F. Melson, Cindy C. Wilson, Ann R. Howie）から合計6名が加わり，本学の講師陣（岩橋和彦，太田光明）とともに，主に大学院生を対象に2年間のコースで実施されている。70時間の講義，28時間の学外実習，80時間の演習，および論文（レポート）作成を修了し，口頭試問に合格した者に対し，Dennis C.Turner，太田光明，および岩橋和彦の署名を付した認定書が発行される。

結果と考察

AAT/AAAについての総括的な講義は，このプログラムの開発者でもあるDennis C. Turner博士によって行われた。また，サービスドッグについてSusan L. Duncan女史，高齢者を対象とした人と動物の関係についてErhard Olbrich博士，子どもを対象としたAAT/AAAプログラムについてGail F. Melson博士，人と動物の関係における調査計画と方法についてCindy C. Wilson博士，刑務所でのAAT/AAAプログラムについてAnn R. Howie女史によって行われた。

Dennis C. Turner教授は4月9～12日および15日，10月7～11日と2回に分け，計10日間講義した。前半の4月においては，実際にターナー氏の研究結果，蓄積された報告をまじえ，人と動物の関係学，AAT/AAAにおいて主に用いられている動物種の特徴を始めとする有用性，後半10月の講義は主にAAT/AAAの実施するうえでの留意点から，より応用的にプログラム作成，進行方法を講義した。

講義は総合的な人と動物関係をイヌおよびネコといったAAT/AAAに最も使用される動物を主体として進められた。人と犬との関係，人と猫との関係において，それらの家畜化の歴史，さらに現代に至る発展した関係とそれらの比較，それぞれの動物種における感覚，コミュニケーション，発達といった行動学的特徴とその比較など広く深く講義された。これらの内容は動物介在療法および動物介在活動を行う上での基礎となるものであり，人が動物との関係において受ける様々な影響，AAT/AAAにおけるこれら動物の有用性を理解する上で大いに助けとなるものであった。さらに動物との愛着，社会的サポートの概念，コンパニオンアニマルの喪失いわゆるペットロスによる影響といった観点も講義内容に含まれ，人と動物の総合的な関係を論じ，人にとっての動物の有用性を教示した。

先に挙げた基礎的知見をもとに，現在まで様々に行われてきたAATの実際例として精神的疾患，ダウン症，ADHD（注意欠陥多動性障害）およびCD（行為傷害）を例に挙げそれぞれの動物における効果と共に具体的な動物介在療法を紹介した。こうした事実例をふまえ，AAT/AAAセッションにおける動物の選別，動物に対する倫理的側面，ストレス等を考慮した各動物種にとって必要となる適正飼育方法を教示した。また，Animal Assisted educationについても講義し，小学校等の学校機関における小児教育の重要性と共に，動物を導入することの有用性を示した。

動物介在療法および動物介在活動を行う上での実質的な手法として，実施施設，使用動物のケア，対象者の状態のAAT/AAA活動に必要となる3種に焦点を当て，実施場所の選別やプログラム作成に付随する評価方法を教示した。また，最終的なディスカッションにおいて，実際に学生がそれぞれの状況下におけるAAT/AAA活動の実施を想定し，討論によるシミュレートから考察を促した。また，対象者の改善を前提とした動物介在療法に不可欠な存在となる医師や作業療養士，心理療養士，さらに動物のケアを担当する獣医師との連携を考えたチームを構成する上での留意点など詳細な部分まで論じた。

介助動物（service animal）とは，障害を有する人々を補助し，彼らの機能的な独立を促すために訓練された動物である。このような介助動物の中でもとりわけ，介助犬（service dog）の活用は世界各国で広がりを見せている。これは，障害を持つ人口の増加，および，犬に教えることのできる作業範囲の拡大に起因するものである。介助犬として訓練された犬は，障害者の様々な日常生活を支え，彼らの地域参加への参入，統合を助け，全般的な生活の質の向上を促進させる。本講義では，介助動物と介助犬の歴史，介助犬が全般的に社会にもたらす影響，介

助犬，そして，障害者取り巻く法律（米国における），介助犬の育成および，適性，トレーニング等，普及体制の歴史，リスクマネージメントと介助犬がもたらす恩恵，介助犬におけるシステム作りと品質管理，および，目標を達成するための障害者と人間医療の専門家を交えた介助犬の在り方の重要性について講義された。講義において，スーザン先生が重要とされた点は，第一に介助犬とは誰のためのものなのかということだった。介助犬とは，障害者の社会参加，精神的肉体的健康面の向上を促進するための一手段であること，また，介助犬をその手段として用いることを決定する際には，障害者の当事者，犬の訓練士，そして，最も重要なのは医療従事者と立法者がそのシステムに関わらなければならないということであった。システマティックな体制が必要不可欠だということである。

AAT/AAAについては，両者の言葉の定義の違いやAAT/AAAに使用する動物とハンドラーの関係，ハンドラーが知っておくべき点等を提示していただいた。

Erhard Orblich教授の講義は，2002年5月22・23日に実施され，各日ともに午前中3時間の講義と，午後にはディスカッションを行った。彼の専門は，心理学（老年心理学）であり，講義は“高齢者を対象とした人と動物の関係”について進められた。

近年，医学の発展，充実した栄養，環境によって死亡率が低下し，ますます高齢者の数が上昇しており，高齢者の健康や心のケアを提供する必要がある。量的なサポートだけにとどまらず，社会的，心理的な側面から，彼らの健康や社会的なサポートが重要である。

心理学や老年学の分野では，親交，社会的サポート，愛着，感情を築く基となる対人能力の重要性が説明される。年をとるにつれ，家族や社会から孤立し，こうしたものが希薄になっていく高齢者にとって，動物の存在は大変有効的である。多くの人間と動物の関係について報告がされているが，高齢者においても動物の肯定的な影響がみられる。その効果として，道具的な効果や，健康への効果，ストレスの軽減やスキル獲得の増加を生み出している。さらに，高齢者の認知能力を引き出し，社会生活における孤立を減少させている。動物は，ただそこに存在し，生じたものを受け入れるものであり，非言語的（アナログ）なコミュニケーションを通した共感を得られることが，高齢者にとって高い効果を得ていると考えられる。

動物学を専攻している我々にとって今までにこうした機会を持てなかったため，心理学の側面からのアニマルセラピーや人と動物の関係について，また，高齢者と動物との関わりについての内容は，大変貴重で興味深いものであった。

Gail F. Melson教授の1日目は，動物介在療法／活動を子供に対して行うことについて，まず初めに，社会的に受け入れられ難い子供たち（精神的不安定，学習障害，行動障害，ADHD（注意欠陥他動障害）コミュニケーション障害，聴覚障害，視覚障害，身体障害など）にはどのような特徴があるのかということについて話していただいた。子供たちに対する，動物園での動物介在活動を紹介，その成果の説明。動物介在療法では，どもりなどは特に治療の必要がなく，他の症状では治療が必要でも，ストレスを軽減させたり，生理学的緊張がなくなったり，良くなろうと思う気持ちがうまれてきたりと，回復の助力となることが多いことを説明。その他，障害を持った子が動物と接することによって，健常の子供たちとの社会的接触の機会が増えるのではないかということ。また，健常の子供たちに対しても，感情的な支えにペットがなりうることなども説明していただいた。これからリサーチしていかなければならないこと，（なぜ動物介在療法は，他の方法よりも良いのか）など，将来に向けての事項の説明，そして動物介在療法の限界について説明された。

2日目は，動物が子供の生活の中にいるということはどういうことなのかということについて，心理学的面から，子供の発達過程を参照しながら解説していただいた。この説明には，“年齢と段階”で子供の発達を見る見方と，“進行”で見る見方と両方を採用して人間と動物の関係（HAI, human-animal interaction）を説明していた。発達段階において環境やまわりの人間社会とどのような関係を築いていくのか，また，それに伴い動物とはどのような関係となり，どのような関係を築くべきなのかということ

について解説し，授業していただいた。発達段階においての身体的／感情的指標と動物との関係についての解説もしていただいた。結論としては，人間中心的な考え方の発達よりも，動物を含めた全体的な環境を念頭に置くものの考え方が形成されるようになるはずであるということであった。

Cindy C. Wilson教授の講義は2002年10月28，29日の各日6時間実施され，講義内容は「人と動物の関係における調査計画と方法」について行われた。

初日はAAA/AATにおける評価の統計的解析の方法，注意点，実際の例などが述べられた。

方法論ではコーホートデザインやランダマイズドコントロールトライアル，SSN，横断面計測，盲検化などが紹介された。中でも強調されたのは以下の2点である。1点目はAAA/AATにおいては，対象となる人が人口統計的に特異であるためにサンプルとして偏りが生じる。よってサンプルを横断面計測することが評価の上で重要であること。2点目は結果を客観的に評価するために盲検化が重要ということである。

注意事項としては，手法が目的・対象にマッチしているか，ランダマイズされているか，測定系の確保，評価項目が定量的に判断できるものであるかなどが挙げられた。

例として，Fredman, Katcher, Baun, DeSchriver, Riddick, Wilson, Serpell, Siegel, Heady らの研究が紹介された。いくつかを挙げると，Siegelは健康管理の研究に人口統計学を用いた。Heady は15歳から54歳の対象者において，健康に関わるペットの有用性を層別の手法を用いて導いた。

2日目は実際の研究論文に関してのディスカッションが行われた。

今回の講義は大変に貴重で，有意義なものであった。統計解析の手法を学んだことで今後，AAA/AATの評価法をデザインする際の大きな道標になると考える。

Ann R. Howie女史の講義は，2002年11月27・28日に実施され，各日ともに午前中3時間の講義がおこなわれた。彼女の講義は，“アメリカにおける刑務所での犬のトレーニングプログラム”と“AAT/AAAにおける患者と施設の評価”について進められた。

初日の「刑務所内での犬のトレーニングプログラム」については，日本ではまったく実施されていないプログラムであるが，服役中の受刑者の精神状態を安定させ，社会への適応を促すだけでなく，刑期終了後の職業を身につけるためにも，とても有効であることがわかった。またこのプログラムを実施するにあたって，看守と受刑者以外に犬の扱いになれているプログラムスタッフの存在が必要であるということがわかった。日本で導入するためには，まだまだ考えるべき問題が数多くあるが，新しい形態のAAT/AAAの話を聞くことができ，とても勉強になる講義であった。

2日目の「AAT/AAAにおける患者と施設の評価」については，実際に病院・施設内でAAT/AAAを実施するにあたって，施設設備，スタッフ，ボランティア，患者の病状等の注意すべき点，チェックすべき点を具体的に講義してもらえた。

将来，色々なかたちでAAT/AAAに関わっていく我々にとって，現場で実際に活動を行っている彼女の講義を聞けたことは大変貴重であった。

要　約

平成14年4月より行っている動物介在活動・療法（AAT/AAA）教育プログラムは，行動学者，人と動物の関係学の研究者，動物福祉の研究者，獣医師，心理学者，精神科医，心理療法士，ソーシャルワーカー，教育学者らが集まって，AAT/AAAに関わる人材を育てるための継続的な教育カリキュラムで，2年間で修了する。

このプログラムは，Dennis C. Turner博士（Institute for applied Ethology and Animal Psychology所長，スイス，本学客員教授）によって開発されたもので，1998年に行われたプラハでのIAHAIO（International Association of Human and Animal Interaction Organizations）国際会議で発表され，1999年の4月に第1期生をスイスで迎え，現在はアメリカはじめ国際的に認知されている。本学では，Turner博士を含む欧米の教育・研究者6名と本学教員からなる講師陣を構成し，獣医学部ならびに獣医学研究科の研究教育カリキュラムへの導入を図った。講義（英語）は，心理学，人と動物の関係学，人と動物に関する行動

学，動物の心理学，AAT/AAAに携わる動物の適切なケア，AAT/AAAに関する倫理や危機管理，患者自身の安全管理，人獣共通感染症，動物のトレーニング方法，産業動物や野生動物を用いた作業療法など多岐にわたる。また，精神科病院や刑務所（アメリカ，カナダなど）の見学，学校への訪問など学外実習も含まれている。2年間の間に，課題レポート（英語）の提出があり，また最終試験は口答試問（英語）によってなされる。

このプログラムを修了することによって得た認定書は，日本はもちろん，ヨーロッパ各国および北米でも通用するものであり，2004年3月に修了する第一期生への期待は極めて大きい。この4月より，第二期生に対するプログラムが開始された。